

タイトル（空間的様相実在論：形式意味論と形而上学の間から）

氏名（遠藤進平 Shimpei Endo）

所属（ILLC, University of Amsterdam）

可能世界が、さまざまな分析や説明を可能、容易とする強力な哲学上の道具立てであることに異論は少ないだろう。なるほど Hintikka を端緒とした幅広い哲学的諸問題への応用という魅力に抗うのは難しい [1] [2]。しかしながら、その可能世界がどのような形而上学的身分を持つのか、ということに際しての合意は得られていない。可能世界は具体者 *concreta* として存在する。そう主張する真正様相実在論 *genuine modal realism* は、しばしば批判にさらされてきた [3] [4]。

本発表では、その改良・発展版ともいえる空間的様相実在論 *Spatial Modal Realism* をあらたに提案し、擁護する。空間的様相実在論は、従来の真正様相実在論の主張（アクト）である具体主義 *concretism* 「可能世界は具体者 *concretes* として存在する」にくわえ、場所主義 *locusism* 「可能世界はどこかに存在する」そして次元主義 *dimensionalism* 「可能世界は次元をもつ」(cf. [5]) を含む。

その擁護の戦略として、まずはじめに、空間的様相実在論と整合のとれた——いわば空間的様相実在論の形式的表現ともいえる——空間意味論 *spatial semantics* を導入する。著名なクリプキ意味論 *Kripke semantics* また位相意味論 *topological semantics* [6] [7] との包含や差分を明らかにしたうえで、この空間的意味論が形式的体系としての利点を備えていることを論じる。

美点はその抱擁性である——すなわち、空間意味論はさまざまな論理学ないし哲学上の立場（またそれらの対立）を一元的にかつ比較的シンプルに表現することができる。矛盾許容論理などの代表的な非古典論理を解釈するにあたり、複数の種類の可能世界などのなんらかのアドホックな構造をつけ加えたりせずに、モデルに対するなんらかの空間的な要件によって特徴づけできるという例をいくつか示す。また、時間が許せば論理多元主義者（たとえば [8]）と論理一元主義者（たとえば [9],[10]）といったメタ論理的な立場の違いも描写できるすぐれたプラットフォームであることについても触れよう。

ここまで、空間意味論のアピールが成功したとしても、空間意味論それ自体はたかだか形式的な理論、純粹意味論 *pure semantics* [11] [12] にすぎず、形而上学的な理論ないし存在者との対応関係は自明ではない。その問題意識を引き受け、それでもなお、なぜ空間意味論について空間的様相実在論をも抱き合わせで採用することを主張するのか、ということについても論じたい。それは、そもそも形式的な意味論に形而上学的理論が対応しているとはどのようなことか、という間に答えることにもなろう。Lewis のメタ形而上学における儉約性の議論を敷衍し、表現と例化の区別をすることの「形而上学的実在の種類の数」不儉約性から、可能世界やその環宇宙といった構造は、理論上の仮構ではなく具体的に実在すると考えるほうがスムーズだ

という理路を 確認する。空間的様相実在論という、実在論のあるひとつのバージョンの擁護を通して、実在論者にひろく共 通してみえる態度を permissive な形而上学として要約することもまた、本発表の副産物的な目標とする。

References

- [1] J. Hintikka, *Knowledge and Belief*. 1962.
- [2] J. van Benthem, *Modal Logic for Open Minds*. Center for the Study of Language and Information, 2010.
- [3] D. Lewis, *On the Plurality of Worlds*. Basil Blackwell, 1986.
- [4] J. Divers, *Possible Worlds*. Routledge, 2002.
- [5] T. Yagisawa, *Worlds and Individuals: Possible and Otherwise*. Oxford University Press. 2009.
- [6] J. van Benthem and G. Bezhanishvili, “Modal Logics of Space,” in *Handbook of Spatial Logics*, M. Aiello, I. Pratt-Hartmann, and J. van Benthem, Eds., Dordrecht, The Netherlands: Springer, 2007, ch. 5, pp. 217–298.
- [7] M. Aiello, *Spatial reasoning: theory and practice*. 2002.
- [8] J. Beall and G. Restall, *Logical Pluralism*. 2005.
- [9] W. V. Quine, *Philosophy of Logic*. Harvard University Press, 1970.
- [10] H. Field, “Pluralism in logic,” *The Review of Symbolic Logic*, vol. 2, no. 02, p. 342, 2009.
- [11] B. J. Copeland, “Pure semantics and applied semantics,” *Topoi*, vol. 2, no. 2, pp. 197–204, 1983.
- [12] A. Plantinga, *The Nature of Necessity*. Oxford University Press, 1978.